



TITLE:

イデオロギーと政治哲学ーレオ・  
シュトラウスの政治哲学論ー(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

早瀬, 善彦

---

CITATION:

早瀬, 善彦. イデオロギーと政治哲学ーレオ・シュトラウスの政治哲学  
論ー. 京都大学, 2017, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-09-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20723>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	早瀬 善彦
論文題目	イデオロギーと政治哲学 ーレオ・シュトラウスの政治哲学論ー		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、レオ・シュトラウスの政治哲学ならびに政治哲学史に関する議論を丹念に辿ることを通じて、イデオロギーと政治哲学の関係を解明することを目的としている。</p> <p>全体の構成としては、本論文全体のねらいと背景について述べた「序論 ディシプリンとしての政治哲学の再考」、および第Ⅰ部「イデオロギー問題の検証」、第Ⅱ部「レオ・シュトラウスの政治哲学論」、結論からなっている。第Ⅰ部では、従来なされてきたイデオロギーをめぐる論争を振り返り、そこにどのような限界があったのか検討している（第1章、第2章、第3章）。そして第Ⅱ部および結論では、イデオロギーを超える政治哲学が成立する可能性を探るべく、シュトラウスの政治哲学論を取り上げ、その思想的な射程を検討している（第4章、第5章、第6章、第7章、結論）。</p> <p>まず「第1章 イデオロギー論の思想的系譜」では、マルクスおよびマンハイムのイデオロギー論について紹介したうえで、いわゆる「イデオロギーの終焉」論の妥当性について論じている。マルクスのイデオロギー論の背後には「生産・労働する主体」としての人間という独特の人間観が潜んでいたのに対し、マンハイムはこうしたマルクスの見方を拡張し、存在と知識の結びつきに着目することで、人間の社会的な存在拘束性に起因するものとしてイデオロギーを捉えることとなった。その後、ベルやフクヤマらによってイデオロギーの終焉が論じられたが、到底そのような状況にあるとは言えないことを指摘している。</p> <p>続く「第2章 イデオロギーと歴史主義」では、第1章のイデオロギー論の思想的系譜を追っていく過程からみえてきた歴史主義の問題を扱っている。ダントーの歴史の物語論、すなわち「言語論的転回以降、歴史はすべて『物語る』という言語行為から構成される」とする歴史的事実の否定論、および、マンハイムの歴史主義への肯定的評価、すなわち「歴史主義は近代以後の基本的な世界観であり、相対主義を克服する唯一の道である」とする議論を検討したうえで、歴史主義と相対主義の関係について論じている。</p> <p>「第3章 イデオロギーと政治的思考の関係性」では、イデオロギーと政治の内在的な結びつきに焦点をあてている。まず、近代以後の政治がなぜイデオロギーと結びつきやすいのかを論じたうえで、オークショットやアレントらによって定義された「政治」が、イデオロギー的思考やイデオロギー政治と無縁でありうるのか検討している。検討の結果、政治が社会全体を覆い尽くした近代以降、イデオロギー的思考が実践に関わるようになるにつれ、政治との接近はさけられず、オークショットやアレントが描き出した理想の政治を実現することが困難になっていると指摘している。</p> <p>以下、第Ⅱ部では、以上のようなイデオロギーの「隆盛」状況において、それとは区別された政治哲学が可能であるかを、シュトラウスの議論を手掛かりに論じている。</p> <p>まず「第4章 レオ・シュトラウスにおける政治的なものの位置」においては、シュトラウスが、近代的な政治観にとらわれず、政治を人間学的な側面からみなおし、「人間的な事柄や政治的な事柄はすべての事柄・自然全体への糸口である」という視点から政治を位置づけたことにより、政治をイデオロギーへと還元してしまう近代特有の政治観とは異なった政治観を提示していることを明らかにしている。</p> <p>続く「第5章 レオ・シュトラウスのレジーム論」では、第4章で明らかにしたシュトラウスの政治観をふまえて、政治哲学における最重要テーマのひとつである、政治</p>			

と社会の関係、すなわちレジームの問題について考察している。レジームは、社会全体に性格を与える秩序であると同時に、その社会のもつ形態をも意味している。シュトラウスによれば、われわれ人間の生はレジームによって規定され、したがって善き生を目指すにあたっては、まずもって善きレジームが模索されなければならない。そして、現状のレジームを超えた、よりよきレジームを構想できるのは「哲学者」だけであることが示唆される。

「第6章 レオ・シュトラウスの歴史主義批判」では、19世紀の歴史学派からはじまり、ヘーゲルにおいてその頂点にいたった歴史主義は、あらゆる事柄を「歴史」に還元してしまったが、こうした歴史的相対主義を克服しようとしたニーチェらは、歴史主義を徹底することにより結果的に一切の「超越したもの」を捨て去ることとなった。シュトラウスによれば、歴史主義を保持しつつ相対主義を克服しようとする思想は、結局のところハイデガーの実存主義へとつながり、政治哲学の基盤そのものを掘り崩してしまう危険がある。

「第7章 政治哲学と自然」では、以上の議論を踏まえ、イデオロギーや歴史主義を超えていく契機としての「自然」について論じている。まず、プラトンにおけるイデアの追求と魂の問題が、シュトラウスのピュシス理解に関係していることを指摘したうえで、そのピュシスがいかにして自然的正 (natural right) として確立されるかという問題を、一般的法についての理性的な熟考という視点から解明している。社会や歴史的状況により人間の思考が拘束され、イデオロギーが生成してくるなかで、いかにこの制約から逃れ、自由な哲学的思考を実現するか、いいかえれば、思想を特定の文化や文明からいかに解放するかという点が、シュトラウスの究極的課題であったと結論づけられている。

## (論文審査の結果の要旨)

本論文は、米国の哲学者レオ・シュトラウスの思想に、イデオロギー論という独特の観点から斬り込んだ意欲的な論考である。近年、政治哲学や規範理論への関心が高まっているものの、その一方で、そもそも政治とは何か、政治哲学とは何か、という根本的な問いについては十分に論じられているとは言えない状況にある。こうした状況のなかで、シュトラウスの議論に依拠しつつ、あらためて政治とは何か、政治哲学とは何かを正面から論じたところに、本論文の一つの意義がある。そもそもシュトラウスは、いわゆる「ネオコン」の思想的源泉にあたる人物としては比較的良好に知られているものの、その思想内容についての詳細な研究は、日本のみならず欧米においても、いまなお少ない状況にある。アレントやシュミットといった、シュトラウスと同時代に生きた政治思想家・哲学者への関心、また研究レベルにくらべて、いまだ発展途上の段階にある。じつはその理由のひとつは、シュトラウス自身があえてわかりにくい独特の表現を用いているためだが、本論文はそうした「わかりにくさ」に正面から取り組み、その思想の本質をつかみだすことに成功している。

従来のシュトラウス研究は以下の四つに大別される。第一は、政治思想史研究者としてのシュトラウス研究である。この研究は、ホッブズやマキャベリなどに対するシュトラウスの解釈に着目するものである。第二は、ユダヤ思想家としてのシュトラウスに着目するもので、近年さまざまな角度から研究が進められてきた。第三は、ネオコンとシュトラウスの思想的関連性を指摘するジャーナリスティックな研究である。そして第四が、シュトラウス自身の思想・哲学を扱った研究である。本論文はこのうちの第四のタイプに属するものであり、特に、シュトラウスの政治哲学を成り立たせているもっとも根底にある部分に注目している。じつのところ、これまでのシュトラウス研究は、彼の政治哲学論には着目してきたものの、彼自身の政治的な事柄に対する判断や評価にはほとんど目を向けてこなかったと言える。これに対して本論文は、シュトラウスのテキストから彼の政治観を内在的に探るべく、彼を単なる政治思想史の研究者として捉えるのではなく、彼がなぜ近代以前の古典的作品を重視し、単に古典的な「哲学」の復権ではなく「政治哲学」の復権というテーマを提示したのか、その根本的な理由を探ったものであり、類例のない研究だと言える。

さらに本論文の特筆すべき点は、このような視点からシュトラウスの議論を追っていくなかで、シュトラウスのピュシス理解に注目し、そこにこそシュトラウスの思想を理解するもっとも重要なポイントがあることを明快に指摘した点である。従来、シュトラウスの主張する自然的正に関しては、部分的に言及する研究は存在しても、その内実、すなわち、シュトラウスのピュシス概念そのものに遡って、正面から論じるとともに、その政治哲学上の意義を示した研究はほとんど皆無であった。この点でも、本研究は、新たなシュトラウス研究の方向性を示すものとして高く評価されよう。

以上のようなシュトラウス研究としての意義にくわえて、本論文は、イデオロギー論研究としても、重要な貢献をおこなっている。マルクス、マンハイム、ベル、リオタールなどの代表的な論者の議論をとりあげ、これらの論者の議論の相互の関係性、ならびに、歴史的な議論の発展と変容をていねいに辿り、詳細に論じている。このようなイデオロギーをめぐる議論の流れを、いわばメタ的に捉え、思想史的な観点からあとづけた研究は貴重であり、近代政治・社会思想史研究としても重要な意義を有すると考えられる。またこの点に関連して、本論文は、イデオロギー研究それ自体を、これまでにない視点で深めている。イデオロギー論は、社会学や政治学などの分野に

においてさまざまな観点から展開されてきたが、歴史主義との関連を指摘した研究はほとんどなく、イデオロギー論の新たな方向性を打ち出す研究であると言える。

ただ、このような意義を有する一方で、いくつかの課題も残っている。

第一に、近代政治哲学全体の批判的克服を主題としながら、近代的なりべラル・デモクラシーの理念に対する評価が不十分な点である。イデオロギーや歴史主義、あるいは臆見を超えた真知を探究しようとするシュトラウスに対しては、近代政治哲学からの厳しい批判がある。本論文ではシュトラウスの思想の深い理解が目指されていることもあり、そうした近代政治哲学との「対決」については十分に扱われておらず、今後の課題であると言えよう。第二に、シュトラウス研究として、さらに視野を広げる余地が残っている。たとえば、シュトラウスのピュシス理解を検討するには、今後はさらにプラトンの『法律』や『饗宴』との関連も踏まえた考察が必要となろう。

こうした課題が指摘できるとはいえ、本論文は、イデオロギー論に着目することで、シュトラウス思想の根底を明らかにした研究として高く評価できる。また、政治哲学とは何か、という根本的な問題に正面から取り組んだ研究としても評価できるものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年7月6日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：                      年                      月                      日以降